

岡本かの子追悼言説分析

松本和也

I はじめに

岡本かの子（一八八九—一九三九）について何事かを論じようとする時、それをどう捉えるかとは別に、まずはかの子の強烈な個性や作家像が問題になることは、今日、避け難い。この点に関して、問題の所在を射当てた次の一文を引いておく。

岡本かの子の伝記については、伝説や逸話がいきいきと残されているのに比して、真の事実を審らかにされていない部分が多い。かの子は、自分自身にまつわる日常的な事象や心情を容易に語ろうとせず、むしろ自己韜晦を信条にしていたかみえるからである。多くの伝説や逸話が常識の尺度を超えて、非凡な個性に満ちているだけに、かの子の伝記的事実は、不思議なヴェールに包まれがちである。その謎を解こうとすることは、またかの子の特異な個性を深めてゆく結果になっている。これはかの子の輪郭が、岡本一家の一平や太郎の手によって伝えられたことに、一因がありそうである。その語り手がまたすぐれた芸術家であったために、夫や息子たちの妻や母への芸術的共感や讚美に終始する傾きをもっていた。それが伝説的な事実の仔細

よりも、神秘的な「神話」を育成する結果になったのである。注がれた一平や太郎の情熱が、客観的な事実を蔽い尽くして、かの子の実像をつかみ難くしたといえる^{二〇}。

ただし、本稿は《かの子の実像》を目指すものではない。もとより、かの子追悼言説にも《神話》を形成していく要素は多分に含まれており、すでに宮内淳子に次の指摘がある。

昭和十四年のかの子没後には、追悼の意をこめて多くのかの子論が生まれたが、何と言っても作家としての生前の活動は数年に過ぎず、読者層が広がらぬうちの死だったために、死後のかの子論は身近な者に限られて、自ずからなる偏向を生んだ。かの子伝説の源となった岡本一平、「いのち」と母性とナルシズムにオマージュを捧げた川端康成、『滅びの支度』をはじめとする滅亡の美学をうたいあげた亀井勝一郎らがその人である。保田與重郎は直接かの子論の形成にはかかわっていないが、日本浪漫派の人々とかの子とのつながりは深い。時代は昭和十二年の日中戦争開始から太平洋戦争へとファシズムへの傾斜が一層きつくなっていた頃である。かの子論にも、そうした時代の影が落ちていた。その作品を論ずる際に、「血統」や「母性」

が大きく扱われたについては、民族主義の高まりが与えた影響も考慮されるべきであろう¹¹⁰⁾。

もちろん、川端康成、亀井勝一郎、林房雄らの批評が、現役時代以来、小説家・岡本かの子の評価に大きな役割を果たしてきたことは、《偏向》云々以前に事実でもあり、それらなくしては、かの子晩年の小説家としての活躍は考えられない。林房雄が「散華抄 岡本かの子女史追悼」(『文藝』昭一四・四)において、《このやうな言葉(かの子讃仰/引用者注)を敢て文字にする二人が身近にゐたといふことが、最近の岡本さんのあの盛んな仕事振りの動機の一つにならなかつたとは言ひきれない》(二七六・一七七頁)と、自身と川端によるかの子への批評的フオローを自負しているのも、故なしとしない。

それでも、かの子追悼言説は、《身近な者に限られて》いたわけではなく、多様な媒体、多彩な書き手によって産出され、その内容・論点も、必ずしも今日想起されがちな“いのち”や“母性”といったテーマに限られていたわけでもない。

本稿では、当時の新聞/雑誌調査に即して仮構した同時代の視座から《神話》を相対化しつつ、死後一年ほどのかの子追悼言説を手がかりにして、かの子像・評価の形成過程とその内容を具体的に分析し記述することを目指す。

II かの子の訃報と追悼言説

昭和一四年二月一八日、岡本かの子は永眠する。そのことは、たとえば「岡本かの子夫人」(『東京朝日新聞』昭一四・二・二四)において、《女流歌人として又作家として有名だつた赤坂

区青山高樹町三本社客員岡本一平氏夫人岡本かの子氏は昨年暮以来過労のため健康を害し湘南で療養中であつたが帰京後心臓を悪くし、去る十七日小石川帝大分院に入院、十八日午後一時半遂に死去した、享年四十七》(一面)と報じられる。

訃報の後、文学者からの反応としては、追悼文がまずは新聞紙上に掲載される。その最もはやいものは、長谷川時雨女史談として右の記事に付された次のコメントである。

早くから国文学や仏教に身を打込んでゐらしただけに小説にはこの長い間の深い学識と豊かな体験がしつかり身についてゐて現代の深い学識と豊かな体験がしつかり身についてゐて現代の深い学識と豊かな体験がしつかり身についてゐて最近は大偉大さが文章の上に現れて来て岡本さんと身近い一人である私など近い内に岡本さんが大作を生んで下さるのを楽しみにしてゐましたのに——(一面)

ここには、かの子の文学活動を支えた教養、その小説による作家・作品への高い評価、それらに基づく将来への期待が語られている。こうした諸点は、以後もかの子追悼言説において繰り返し言明されていくことになる。その意味で、右の一文はかの子追悼言説のいわば範型といえる。実際、長谷川時雨は二日後にも「かの子の訃報」(『都新聞』昭一四・二・二六)を發表するが、《このごろの岡本かの子は、大きな開いた花が傍にあるやうな気持ちをおたくしに与へてゐた》、《密かに期待してゐた、昭和の紫式部は逝つてしまつたのだ》(一面)と、紫式部になぞらえたかの子への期待を追悼の意にかえてゐる。

かの子同様、小説家にして歌人の今井邦子は、「岡本かの子女史の死」(『読売新聞』昭一四・二・二五)において、先の範型を變奏させた次のような一文を草している。

岡本さんは女流には稀な強く逞ましい人である許りか、この人ほど豊かな芸術的天分を持った人はなかつた。あの人の芸術的な劇しさと純粋な美しさは全く日本の女流文学者の中では珍重されるべきものであつた。最近では幾つかの傑れた小説を書き、そのいづれも、男子作家の域を超えたものであつた。そして岡本さんの作家的才能はいよ／＼円熟し誰もが岡本さんほどここまで成長するだらうかと畏敬の念を抱いてゐたのであつた。(五面)

ここで今井は、かの子の芸術性を顕揚しつつその特異な位置を示し、晩年の《円熟》に言及した上で、成長への期待を示している。式場隆三郎も「一日一題 文学者の寿命」(『読売新聞』〔第二夕刊〕昭一四・二・二六)で、《近来の作品が一層目覚ましい進展を示しつつあつた折として、惜しい気がする》(一面)と、晩年の活躍からその死を惜しんでいる。《歌人として円熟し、作家として油の乗りつゝあつた今日、卒然として逝かれたことは、私たちに寝耳に水の驚愕と同時に、林中の巨木の倒れたやうな寂しさを与へた》とその急逝を惜しむ「岡本かの子氏を憶ふ」(『帝国大学新聞』昭一四・二・二七)の矢田津世子は、次のようにかの子への総合的な評価をさしむける。

「鶴は病みき」以来の小説道における同氏の活躍には、眼を見張るばかりであつた。さすが、永い間歌道にうちこまれ、また、人生に深く足を突き入れた体験と、より深い洞察力とをもつてその全精力を賭けられただけの立派な小説である。(七面)

四月号の雑誌でも、かの子追悼言説では同様の論点が反復し、拡声されていく。P「公論私論」(『早稲田文学』昭一四・四)

はそれを見事に体现しており、《晩年堤が切れたやうに多作したが、それであつて相当豊潤な佳作を残した》というかの子について、《本当の作家としてはじつにこれからだつた。その意味で惜しまれる》(三二頁)と評されている。歌人からも、四賀光子が「岡本かの子さんの想ひ出」(『短歌研究』昭一四・四)で《鶴は病みき》以来「母子叙情」「丸内挿話」等次ぎ次ぎに発表される創作も皆好評であることを聞いて、ひそかに前途を祝福してゐたのに、全く寝耳に水のやうな急逝の御知らせで、驚いたことであつた》(一九五頁)と、現役時代の小説への高い評価に即した期待が語られていた。また、かの子が関わっていた雑誌上にも追悼の辞が掲載される。《かの子さんの文学活動はこの一二年素晴しかつた》という和木清三郎は「岡本かの子の死を悼む」(『三田文学』昭一四・四)で、《もう、一二年も生きてゐたら、かの子さんはどんな位置を文壇に占めてゐたらう!》(二六七頁)と、やはり生前の評価の延長線上に今後への期待を示した。小林秀雄は「文学界後記」(『文学界』昭一四・四)で、かの子の死を次のやうに悔やんでいる。

僕の知つてゐる女流作家のうちで、何か非凡なものを持つてゐるのは、この人だけだと思ふのであつたが、その非凡なもの、漸く小説に現れ始めたと思ふ間もなく、亡くなられて了つた事は、いかにも残念な事である。(二八〇頁)

《非凡》という表現でかの子のかけがえのない作家性を顕揚した小林だが、こうした見方は没後ますます強まっていく(次節参照)。また、《後もう拾年は生きてゐてもらひたかつた》という無署名「編輯後記」(『文藝』昭一四・四)では《来月には氏の遺稿の発表を読者に約して、この日輪の如き作家の死を心

から悼む次第である》(二五一頁)と、この後、長らく展開されていくかの子遺稿発表の予告がなされてもいた。

翌月に入っても言及はつづく。《芸術家として真に本望を遂げた人といふべき》、とかの子を悼む「文芸時評(4)流行作家へ一言」(『読売新聞』昭一四・五・四夕)の宇野浩二は、《鶴は病みき》以来、せつかく本来の道を見出し、その道を見事に開き進みながら、何ゆゑに死なれたか》(二面)とその死を悔やむ。室生犀星は「小説の難かしさ(中)」(『読売新聞』昭一四・五・二五夕)で、《すくなくとも、小説の難かしさまで行く前に小説をかくのが甚だ面白かつたにちがひない》(二面)とかの子の創作を語ったが、北岡史郎は「文壇時評 四月の文壇」(『若草』昭一四・五)で、《鶴は病みき》このかた短い作家生活のあひだにつきつぎに独特の才気と□氣ホスピタリティと妖気の創作を世に問ふてきて、いまや大輪の花を開かんとする感じの時だっただけに、余計に惜しまれる》(三六頁)と、かの子晩年の達成の延長線上に期待を示した。《先づ豊潤な才能に富むこの作者の急逝を悼む》という「創作月評」(『文藝』昭一四・五)の天下泰平は、かの子の多才ぶりにふれた上で、《多年模索してゐた創作欲求のはけ口をやつと小説道に発見し、その為一方命を縮めるほどの作者をセツカチにしたやうだが、素質的な真のよきものが夾雑物無しにその儼輝き出すのはじつにこれかからだつた》(二八三頁)と、その可能性を惜しんでいる。

こうしてかの子追悼言説においては、頻りに類似した論点が反復・言表され、整序された範型は一年後、たとえば次の亀「日本評論」(『三田文学』昭一五・三)へと結実していく。

岡本かの子女史の文壇へのスタートは、まるで打ちあげ

られた花火のやうな華々しきであつた。そして、「老妓抄」、「丸の内草話」その他名作を残して、より高い完成への途上で、惜しまれつゝ花と散つてしまつた。その僅かな年月の間に、量的にも質的にも、余りにも異常な作家生活を続けた女史の死が巷間に伝へられた時、我々は余りの唐突さに驚き、あの豊饒な肉体的な作品は、「はからざる運命に追ひ迫られた作品」であつたのかと、はげしい燐光のもえ上るのを感じずにはゐられなかつた。(二五五頁)

総じて、死後一斉に産出されたかの子追悼言説は、現役小説家としての短期間の達成とその間の成長を積極的に評価し、その延長線上にさらなる活躍を期しつつ、それが急逝によつて果たせなくなつたことを惜しむという範型をなぞりながら反復されていった。その時、かの子の生涯からすれば晩年にあたる小説家としてのキャリアは、死(後)から事後的にも意味づけられ、命を燃やした成果として神話化されていったのだ。

III 追悼言説上のかの子評価

現役晩年の延長線上でその死を惜しむ声は、当然かの子(作家・作品・人物)に対する高い評価が前提となつている。可能性を含めた才能に対して、さまざまな観点から、時には過剰とみえるほどの評価がかの子追悼文では語られていった。

《岡本かの子さんの文学そのものが運命的にまでこの死に結びつけて考へられ、一層痛ましく哀情の念を呼び起す》と感情を吐露する「文芸時評(1) 複雑の美について」(『読売新聞』昭一四・三・二九夕)の窪川稲子は、《岡本かの子さんの文学

の実体は、いはゞ岡本さんひとりの中に存在するやうなものだとして、次のようにかの子文学の美質を語っている。

いはゞ現実から離れたところの想念によつて人間の生活が描かれてゆくので、却つて複雑な相を持つてゆくやうに思はれる。岡本さんの文学の美しさはこゝにあるやうに思はれる。(二一面)

作品の具体的な言葉よりも、その紙背にある作家性に特徴(《美しさ》)を見出す傾向は、この後もつづいていく。《これから何年か後に、岡本が、極彩色のごとき風をしなくなり、寡作家になつたら、素晴らしい小説を書くやうになるのではないかとみていた「文芸時評(5)二三の作家」(『都新聞』昭一四・三・七)の宇野浩二は、《歌人としては古い人であるが、小説家としては新進作家》で、《少なくとも新進作家らしい気概と野心のあり過ぎる作家》(一面)だと評している。《岡本氏の小説が極端に嫌ひ》で《それを常に筆にもしてきた》、《だが「老妓抄」を読んですっかり参つてからは、今度は極端な礼讃者に成つた》という「文芸時評(2)岡本かの子論」(『都新聞』昭一四・三・二八)の高見順は、かの子を《自信の作家》と捉えた上で、《その小説の魅力も自信の魅力》(一面)だと紙背の作家性にその特徴を見出している。舟橋聖一は「小説家の「カン」の問題——文芸時評——」(『文学界』昭一四・五)で、《ほんの五、六年前までは、岡本かの子氏の原稿は、何処の雑誌社でもあまり歓迎せず、半ケ年も組おきの悲運に遭遇した小説もあつた》ことにふれた上で、《急にピツチが上つて、何を書いても、ピタピタと、壺にはまつて来たのは、ほんの最近》で、《怖いほどの「カン」が来た》(二〇三頁)と、生前晩年の人

気と併せて、直感的感性が端的に《「カン」》と評されている。

また、《考へてみれば、こゝ一年間の女史の華やかさは、人間わざではなかつたのかも知れない》と生前のかの子の精力的な創作にふれるS・Y・Z「文学界」(『三田文学』昭一四・五)では、《その充実した生命感、その奔放、広い教養、何一つ昔の人紫にゆづるところなく、しかも困難な現代を輝かしてゐた》点、《事実の世紀と云はれる現代にあつて、女史程豊かな物語をなし得てゐるものはない》点を以て、《実に天来の作家》(一六四頁)だと位置づけられもする。また、北岡史郎は「文壇時評 四月の文壇」(『若草』昭一四・五)で、《この小賢しくて世智辛いばかりのやうな感じの文壇に、岡本かの子女史のやうな作家は珍らしく豊かな楽しい感じの存在》^{本誌}だつたとして、《芸術的な□光をもつて俗流のうへに存在してゆく文学者は、ますます少くなりつつある現代においては、愛情の思ひは二重に湧く》(三六頁)と、文学場における特異な位置という観点からもその退場(死)を惜しんでいる。

このように、より広いコンテクストからもかの子は期待を集め、惜しまれていた。《岡本かの子氏は、思想のあり、精神のある作家として、日本には、稀風の出現であつた》と絶賛する「小説と批評——文芸時評——」(『文藝春秋』昭一四・五)の川端康成は、次のような角度から評価してもいた。

この人には、西洋風に東洋風をも兼ねて、頽廢とか虚無とか懷疑とか呼んでいいものが、ほんたうに含まれてをりながら、さういふ消極的なべきものを、大きい積極的な生命へ支へ上げてゐるところがあつて、私は自分等の道の光明を見たのであつた。(二五〇頁)

川端は、ここで洋の東／西を止揚する積極的なデカダンスと、
いう観点からかの子を高く評価する。同様の観点から、《岡
本氏の作品について云へば、あの贅沢さといふのは滅亡の決意
なのである》と断じる亀井勝一郎「滅びの支度」《『文藝』昭一
四・六）にも、その主体形成に関わる次の指摘がある。

岡本氏が小説に主力を注ぎ、逞しい創作力を發揮したのは
欧洲から帰つてからである。昭和四年から七年までの欧洲
旅行中に、岡本美学ともいふべきものの核心が結晶したの
ではなからうか。東洋的教養が巴里の古典的生活に触れて、
それを抱撰消化しながら渾然たる一体に結晶したのだと思
ふ。(一七頁)

その後の文学史において、かの子が浪漫主義の系譜に配置さ
れていくのは、単に表面的な作風ばかりでなく、生前からのこ
うしたかの子評価(言説)ゆえのことだと思われる(三〇)。

小説家としての出発期からかの子を批評的にフオーローしてき
た川端は、少なからぬかの子讃仰言説を書き継いだが、その文
学的特徴については「岡本かの子」《『日本評論』昭一四・七）
で論じている。《岡本さんほど、官能の匂ひにむせぶやうに、
肉体を描いた作家は、日本文学の古今に、殆んど類を絶する》
(三〇〇頁)というモチーフとその描法、《自己陶醉の、また
自己崇拜のナルチズムスは、岡本さんのいちじるしい性向であ
つた》(三〇三頁)という作品を紙背から支える作家性、《その
無用とも見える装飾は、美の神の創造の饗宴に列しようとする
人工の極の夢想と、不死の美の鉉脈を蔵する地霊との、神秘的な
合作なのである》(三〇五頁)という小説表現等、複数の観点
から総合的にかの子を高く評価してもいる。これらを統合して

抽象化すれば、川端康成「女体開頭」について「『日本評論』
昭一五・二)における次の評になるだろう。

岡本さんの作家としての声誉が、死後に一層高まつて来た
のは当然のことながら、その全貌が伝へられ、真価を知ら
れるのは、尚五年・十年の後であらうか。広くて深く、花
やかで寂しく、甘くて厳しく、豊かで高い岡本さんの作品
は、けちな量見では味はひつくせないものがある。私は岡
本さんを現代の最大最高の作家であると信じるばかりでな
く、日本では、求めて得られない存在であつた。(三七七
頁)

もっとも、かの子作品への同時代評を参照すれば(四)、生前
には毀誉褒貶相半ばしていたこともあり、死後にもなおかの子
への批判的な視線も存在した。《年も五十歳に近く、まことに
時節おそくバツと咲いた濃艶な花の感があつた》とかの子の死
を悼んだ、向島生「大波小波 かの子の文学」《『都新聞』昭一
四・三・五)には、次のような一節もみられる。

▼しかしこの際、この作家の全体的批評は大切である。
彼女の小説は、はたして一部批評家のいふ如く、夜光の射
すごときものであつたか？ 一種何か神秘的な褒め方をさ
れたやうな作品で、古来真にすぐれたものがあつたかどう
か？ そこらあたりをこの際考へ直すことも必要であら
う。(二面)

しかし、言説化された批判は少なく、大勢としては、こと死
後における礼賛の風潮は、文学場における構造的なものにみえ
る。《諸家の追悼文を色々の新聞や雑誌》を総覧して《皆稀に
見る大作家を失つて惜しいことをしたといふ意味の点で一致し

てゐた」ことを確認した「読書のページ——岡本かの子と明石海人——」（『新女苑』昭一四・五）の河上徹太郎は、次のようにかの子追悼言説の基底的メカニズムを剔抉している。

此の讃辞は死者に対する礼儀といふよりは、皆実感である。と同時に、も一つ裏をいへば、従来必ずしも氏の作品を全般に支持出来なかつた人も、その最近作を読んで矢張立派な作家だつたと思ひ直させるやうなものを書き始めた矢先逝去されたため、惜しい作家を失つたものだといふ感が一入強いのだといふことがいへるのである。それ程岡本かの子氏は、独特の成長と独特の素質を持つた、普通一般の文壇の小説家とは違つた作家だつたのだ。（二八三頁）

さらに、河上は悪い意味での文壇ズレをせずに、『自分の生一本な童心を楯にとつて、知り且つ感じた限りの世界を悪びれもせずに描いていつた』点、つまりは言葉本来の意味での作家性を高く評価している。別言すれば、河上にとつてかの子は、『之程いゝ嘘の世界を書いて本当の世界にした人はない』（二八五頁）ということになる。北澤喜代治も「かの子の文学——呵硯山房雑記——」（『文藝首都』昭一四・九）で、『かの子は常に素人臭いかけ出し作家然たる風貌を呈して居り、人によつてはこゝにかの子文学毀誉の重大な基準を置くかも知れぬが、私はこゝにこそかの子文学のかの子文学たる特質がありとし、かの子の文章が消されずに焼付いてゐる所以を認める』（九八頁）と言表している。あるいは、同様の評価は、次に引く青野季吉「経堂襟記」（『文学界』昭一四・一一）にもみられる。

かの子氏の作品には、ずいぶん生硬な表現や、月並な描写などもあつて、私など時々その空疎さに真から眼を離すこ

ともあるが、そこに描かれた美女たちは不思議な魅力をもち、怪しく美しい光の中に浮き上つて来る。その幻術のものは作者のナルチスムスの作用に相違ないのである。

その上で、青野は『われわれは今日まで自己批判や自己呵責の方ばかり心を惹かれて来て、それだけが真実のやうに思ひ込んでゐた傾きがないかと顧られる』（一七四頁）として、自信に満ちたかの子文学を積極的に肯定する。一連の同時代評においては、作品に見出されたはずの瑕疵が、小説家（の個性）を經由して好評価のポイントへと反転されているのだ。

やはり、かの子追悼言説を総覧して『殊に亡くなられた後にも、なほ多くの至宝のやうな作品が遺稿として発表されたのを見て人々はたゞ驚嘆の眼に瞠若たるばかり』で、『惜しいことをした』という「文芸時評」（『文学者』昭一四・五）の田邊茂一は、『感慨が万人の胸に齊しく灼きつけられてゐる』として次のようにかの子の現役時代を振り返っている。

若し仮りに岡本かの子の死が一年早かつたとしたら、或ひはその作品の発表の機会が一年後れてゐたとしたら、この昭和文壇の光芒に、われ／＼はめぐり遇へる光榮を有しなかつたかも知れないと思ふ。

田邊は、かの子の発見、評価が遅れたことについて、『われ／＼の責任、手落ちといふやうなものまでも感ずる』（二一〇頁）として、同業者（一般）の責任にまで言及している。

こうして没後においてかの子が回顧される時、その人物像もまた話題とされていく。このタイプの文章を誰よりも多く書き継いだのは、夫の一平である。一平は、後に『かの子の記』（小学館、昭一七）にまとめる追悼文を、実に多彩なメディアに書

きつづけ、(文学者としてというよりは人物としての)かの子の複雑な教養や人物としての多面性を発信していった^(五)。

《かの子氏と対座してゐると、私はいつも一種の鬼気を感じないわけにゆかなかつた》と振り返る亀井勝一郎は、「牡丹観音」(『新日本』昭一四・三)で、《千年の甲羅を経た大きな金魚》、《古代の魔術師》、《可憐な童女》(六二頁)と複数のかの子像を描きだす。このような多面的な相貌は、宮本百合子「人の姿」(『中央公論』昭一四・五)においては、小説の紙背からうかがえる人物(像)の不可解さとして描かれるだろう。

かの子さんの小説は、かの子さんの曲線、色、厚み、音調、眼の動かしかた、身ごなしすべてをもつてゐるのであるけれども、そこにかの子さんといふ人が出て来ると、一目でわかつたものの代りに、何だか分るのだけれど分らない気がする。(二九五頁)

他方、《やれ思ひあがつてゐるとか、可笑しい位、自惚れてゐるとか云ふたぐひの世評》を聞き及んだ後にかの子本人に面会した往事を振り返る「故人の追懐(中)」(『都新聞』昭一四・七・二〇)の長田秀雄は、《面と向つて、話してゐると、きはめて自然の感情として、素朴な叙情詩をきいてゐるやうな美くしさに打たれ》、《すつかり好きになつてしまつた》(一面)と、世評に反して、その美的な一面を語っている。

以上のかの子追悼言説の分析から、なぜ没後にかの子が高く評価されたのかという問いに対しては、次のような考察が可能である。作品個々の同時代受容については別稿^(六)に譲るが、一つには死のタイミングがあげられる。「鶴は病みき」(『文学界』昭一一・六)以来、一定の評価を得てきたかの子は、「老

妓抄」(『中央公論』昭一三・一一)、「鯨」(『文藝』昭一四・一)、「家霊」(『新潮』昭一四・一)といった後に代表作ともなっていく短編を立て続けに発表した直後に没している。そのこと、(こと、それまでかの子を評価していなかった者にとつては)生前にかの子を正當に評価する機会はごく短期間に限られ、また、最晩年の傑作ラッシュが将来に期待を抱かせたことも相俟つて、そうした評価・期待が追悼言説に流れこみ、かの子評価を押しあげていったのだ。そこに、多面的で掴みきれない人物像も重ねられることで、かの子は、多くの文学者にとつて、十全には理解し得ないままに死んでしまつた重要な対象として、存在感を増していった。それゆえ、その死を契機に、成し得なかつた理解⇨評価の代補として、かの子の再発見⇨再評価が短期間のうちに進み、かの子評価も瞬く間に高められていったのだ。これが、『神話』生成の過程・内実である。

IV 可能性としての遺稿群

「年譜(昭和十四年四月の項)」に《遺稿としておびただしい分量のものが発表され、瞠目された》^(七)とある通り、かの子の死後、追悼言説にくわえ、小説(遺稿)の発表が相次いだ。

四月号を見渡せば、短編「河明り」(『中央公論』)、連載最終回の「丸の内草話」(『日本評論』)の他、長編「生々流転」(『文学界』)の連載第一回が発表されている。《この三篇を通読して、惜しい女流作家を死なせたものかなと、遅ればせながら嘆息した》という「文芸時評(2) 惜しい女流作家」(『東京朝日新聞』昭一四・三・三〇)の杉山平助は、遺稿を通じて発見したかの

子の文学的価値を、次のように語っている。

岡本かの子は、私にとつて、一個の社会的な女性にすぎず、曾て作家として考へたことはなかつた。「略」しかし、今月の三篇を通読した時に、始めて、これくらゐの女流作家は滅多に出ないな、といふ感にうたれたのである。(七面)

また、上林暁は「文芸時評 岡本、火野、中山、志賀氏など」(『帝国大学新聞』昭一四・三・三一)で、右の三作を目にして「最後の光焰のやうな気がして痛ましい」と感じ、「かの子女史が死の前僅々数年の間に示した光輝は、たしかに死の予兆であつた」(九面)と、晩年のかの子の活躍をその死から新たに意味づけていく。「あとからあとへ遺稿がとび出して来るのには、驚いてゐる。まるで一生かかつて遺稿を書いてゐたやうな変な気持もする位だ」という「女流作家論」(『新潮』昭一四・五)の丹羽文雄は、「岡本かの子の存在は、日本文学の一つの刺戟剤になつてゐたことは確」で、「私達のもつてゐないものを女史は多分に持つてゐた」(一八五・一八六頁)と、その特異性を確認している。このように、死後発表のかの子遺稿群は、次に引く神田鶴平「創作時評」(『新潮』昭一四・五)の指摘によれば、改めて多様な読者(層)に対してかの子作品に向きあふ機会の提供ともなつたようである。

彼女の生前には、彼女の作品を見向きもせず、または見向いても悪口ばかりいつてゐたものが、彼女の死後その遺稿に接して、にはかに彼女の偉業に感嘆し、その死を惜しむやうな語を發してゐるのを見受けて、人生のままならぬ不可思議さを、今更ながらに覚えるのである。(二〇〇頁)

雑誌五月号には、「生々流転」(『文学界』)にくわえ、「雛妓」(『日本評論』)、「ある時代の青年作家」(『文藝』)が発表される。これをうけて、「今月は創作欄でも女流作家は、なかなか活躍してゐる」という「文芸時評(3) 女流作家の活躍」(『信濃毎日新聞』昭一四・五・二二)の古谷綱武は、「殊に死んだ岡本かの子氏は、男の作家も入れて、相変らずいちばん活動してゐるが、書き残した作品が、こんなにたくさんあるといふことは、とにかく最近の作家にとつては驚異」(四面)だと、文学場の中心に、死んだかの子を配置する。生前からかの子を高く評価していた武田麟太郎は、「文芸時評(1) 未完の青年作家」(『中外商業新報』昭一四・五・三二)に次のように記す。

すでに肉体は滅んだ同氏の書き残して行つた未発表作品は、いよいよ数多く見出されて、いかに彼女が名譽ある小説家の名にふさはしい存在であつたかを物語つてゐる。まるで「遺稿」をなすためにすべてを小説に打ち込んでゐたやうで、時々は限りない愛惜の念が、私の胸のうちで彼女がまだ生きてゐるのではないかと錯覚を起させる位だ。(五面)

こうした遺稿群の継続的な発表は、文学場におけるかの子の存在感を維持させるばかりか、以下の同時代評からみる限り、さらに文名を高めた。しかも、当人がすでに死去しているという事実があり、かの子の潜在的^{ポテンシャル}能力の奥深さは改めて想像されていく。その奥深さは、「女体開頭」(『日本評論』昭一五・二・一二)連載開始時に付された、川端康成「女体開頭」について(『日本評論』昭一五・二二)によく示されている。

生前に私達が見た作品は、いはば氷山の水面に浮ぶ部分に

過ぎなくて、その巨大な姿は、死後までかくれてゐたのである。古今に類を絶する異常な作家生活であつて、私はただならぬ驚きに打たれる。

しかも、遺稿の発表が続く以上、氷山の全体はつねに不可視の潜在的^{ポテンシャル}能力として死んだかの子に幻視されることになり、従つて川端も右の引用につづけて《死の近づくにつれて、このやうに豊麗^{ポテンシャル}な開花を見せたといふことは、日本離れのした大天才のしるしでなくて、なんであらう》(三七六頁)と、その才能に手放しの賛辞を送る。同様の感想は、「文芸時評」(『三田文学』昭一五・四)の山本健吉からも言表される。

岡本かの子が逝いてからまだ一年余りを経過したばかりだが、既に彼女の多彩豊富な生涯は、伝説上の人物にも相応しいやうなヴェエルを卸して、我々にははつきり見えな^い。人々は死の前の数年間に於ける彼女のたくましい生産力に驚異の眼を見張つたが、死後なほ無尽蔵に残されてゐる遺作の山を見て、言ふべき言葉を知らないのである。(一六〇頁)

遺稿として新作が発表されつづけ、しかもその《生産力》が生前晩年の短編や『生々流転』が提示した『いのち』というテーマとも重なることで、没後かの子像の神話化は進んでいく。この時期に、『故岡本かの子氏の小説が生前よりも今盛に発表されてゐる秘密は何であらう』という問いを立てた「作家の姿勢(文芸時評)」(『文藝首都』昭一五・八)の西村時衛によれば、『人々は情熱がほしいのだ。世の中を理論的には容認できても、これを動かして自己を行動にまでもつてゆくだけの情熱をみつきたいのだ』(一一〇頁)と、かの子作品に他作家・

他作品には求め得ない《情熱》を見出し、求めてもいる。

もちろん、かの子の死後、遺稿は夫・岡本一平による整理を経て発表されていく以上、どこまでかの子のオリジナルで、どの程度一平の手が入っているのかという、本文をめぐる難問^{ナンモン}が常につきまとうことにはなる。ただし、同時代において、そうした論点がことさら問題化された形跡はなく、作品内容はもとより、間断なく遺稿が発表されていくというその物量に裏打ちされた事実が大きな意味をもち、かの子評価を支えていく。

V おわりに

短期間における飛躍的なかの子評価の上昇(神話化)は、同時代の視座からの見取り図として次の三段階に整理できる。

第一に、毀誉褒貶相半ばしながらも、「鶴は病みき」、「母子叙情」(『文藝春秋』昭一二・三)、「老妓抄」をメルクマールとして段階的に賛同者を増やしていった現役小説家時代が、まずある。こと昭和一四年には、素材派芸術派論争や女流作家の隆盛といった文学場の動向^{ウネ}との相関関係の中で、その絢爛たる文彩、強烈な自己肯定(作家性)、審美的なテーマが評価され、次第に文名を高めていった^ト。第二に、本稿Ⅱ・Ⅲで検証した、かの子の死を事件として紡がれた、かの子追悼言説による再評価がある。ここでは、生前からの評価にくわえ、かの子への期待や潜在的^{ポテンシャル}能力までもが掘り起こされていく。あるいは、かの子の死を契機とした再発見、作家・作品評価を好転させたケースも少なからずあり、支持の裾野は広がっていった。第三として、本稿Ⅳで素描した、発表されつづけていく遺稿と

その同時評による、断続的な評価の深化・好転があげられる(十一)。

最後に、かの子評価の推移から浮上してきた論点について検討することで、本稿のまとめにかえたい。まず、佐々三雄「文芸時評」(『早稲田文学』昭一四・五)を引いておく。

このひとの沢山の小説を、ぼくは殆んど読んでゐなかつた。それに、ある偏狭な気持から、さほど関心もよせず遠い気持でゐた。「略」それを今度は感心したのでつた。文学界の生成流転を読み始めた時には、まだ承前の先入感があつた。が、これを読み、中央公論の「河明り」を読むに至つて、ぼくはいろんなことを考へだし、今月作品のなかではともかく一等だと思つた。今ごろの作品で、部分の完璧さで以て読ませる作品といふものはない。描写、といふよりは表現であらうが、部分の映像の完璧な持続は、大正の少数の作家以外に、ぼくらは出会はなかつたのである。

(七四・七五頁)

まさに、その死を契機に、しかも《先入観》をもつてかの子を読んだ佐々ではあつたが、いざ「生々流転」と「河明り」を読んだ結果、高く評価している。その際のポイントとして注目したいのは、佐々が《今月の二つの作品から受けたものは、なにやらどつしりした爛熟した文化といふもの》、《この作品の趣味と背景は、東京の下町の江戸の昔から明治を経て蓄積された、重量のある文化》(七四頁)だと繰り返し指摘した《文化》の内実である。佐々はそれを大正期(以来)のものとして見立てるのだが、振り返つてみれば、上林暁も「丸の内草話」、「河明り」、「生々流転」を評した「文芸時評 岡本、火野、中山、志賀氏

など」(『帝国大学新聞』昭一四・三・三一)で、《かの子少女の感覚や人生観は、明治の育ちと下町の人情の方が勝つてゐて、やゝ古風で大時代的な感じがする》(九面)と指摘していた。また、生前晩年の「鮎」や「家霊」の同時代評では、谷崎の名を参照しつつ、古さが頻りに論及されていた(十二)。

これらを総じて、肯定的な意味で、かの子(作品)は古く、谷崎風であつたということになるが、逆にいえば、それは昭和初年におけるプロレタリア文学や昭和一〇年前後における多様な表現を通過した青年世代の文学とは、およそ文学観を異にするということでもある。多くの文学者が抱えた歴史的な体験を欠落させることによつて、かの子(作品)は、大正期の系譜を継ぐ者として文学場に映じていたということになる。ただし、別言すれば、こうしたかの子のやり過ごし方自体が歴史的な振る舞いでもあり、また、独自の作家性を、社会状況や文学場の動向に左右されずに貫いたがゆえの強みでもあつた(十三)。

総じて、かの子追悼言説に注目した同時代の視座からの調査・分析に即すならば、没後かの子像の形成は、必ずしも岡本一平・太郎や《身近な者》に限られていたわけではない。広く文学場から寄せられた、生前を振り返つての作家・作品評価や、愛惜、期待、さらには文学場における配置などが集積されることで、歴史的に、しかし短期間にかの子神話は形成されていったのだ。それは、一人かの子の問題であると同時に、文学場の動向をも浮かびあがらせる、一つの歴史的な事例でもあつた。

[注]

(一) 熊坂敦子「岡本かの子研究史」(熊坂敦子編『岡本かの子の世

界』冬樹社、昭五二）、二〇一―二〇二頁。

(二) 宮内淳子「序——花の寺・ベネチアの橋」(同『増補版 岡本かの子論』ED I、平一三)、一三三頁。

(三) 一例として近代浪漫派文庫『岡本かの子／上村松園』(新学社、平一六)があり、高須芳次郎「岡本かの子の芸術」(『月刊文章』昭一五・三)では『かの子』の小説、戯曲は、いづれも、新浪漫主義に起ち、極めてそれを鮮明に表現してゐる。『河明り』などにもこの傾向が強い。『老妓抄』とても、同一系統に属する作品である(『四〇・四一頁』)と評されている。他に、『故岡本かの子氏の作品など、なかなかよい文章であつた』と論及する日本浪漫派同人の浅野晃は「強い文章を」(『新潮』昭一四・九)において、『あの鋭い機鋒を蔵した粘液質の文章は、奇妙に力づよいものであるが、その一つの原因は伝統和歌の底力から来てゐる』(五三頁)と推測している。

(四) 拙論「現役小説家・岡本かの子の軌跡——同時代評価の推移とその背景」(『国語国文』平二八・四)参照。

(五) 同書は、「生命の娘かの子」、「エゲリアとしてのかの子」、「かの子と観世音」などのかの子像を打ち出すと同時に、そうした標語の提供源ともなつた。

(六) 注(四)に同じ。

(七) 「年譜」『岡本かの子全集 別巻二』冬樹社、昭五三)、三三四頁。

(八) かの子に加え、岡本一平、新田亀三、恒松安男が関わつた『い
わゆる『岡本工房』の機能』(二頁)を問題化すべきだとする、

田中厚一「交響するテキスト——岡本かの子の(書き方)をめ
ぐつて——」(『帯広大谷短期大学紀要』平九・三)参照。

(九) 拙論「富澤有為男『東洋』の場所——素材派・芸術派論争をめ
ぐつて」(同『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・
戦争文学』立教大学出版会、平二七)参照。

(十) 注(四)に同じ。

(十一) かの子遺稿群の同時代受容については、別稿を期したい。

(十二) 注(四)に同じ。

(十三) 伊藤整は「解説」(伊藤整編『現代日本小説大系 第五十三
巻』河出書房、昭二六)において、堀辰雄、太宰治と並べてか
の子について『それぞれ違つた形においてではあるが、昭和十
年代の日本文学の芸術至上主義的な一面を代表し、この時代に
おいて注目のまとなつた人々』(三二七頁)だと捉えた上で、
『岡本かの子の場合、自然に芸術家としての彼女は、不合理な
旧秩序によつて保たれてゐた日本社会にあつての必然の生命認
識の姿勢を取つたのであつて、それは彼女自身のエゴの保存に
必要であり、かつその社会では、それと同じやうな姿勢でエゴ
を保つ必要のあつた多数の人間が存在し、彼女に共鳴したので
ある。』(三四二頁)と指摘している。

※本研究はJSPS 科研費15K02243の助成を受けたものです。

(まつもと かつや・神奈川県立神奈川大学外国語学部准教授)